

文化の担い手となる映画館を、目指し多彩な取り組みに挑み続ける

ミッドランドスクエアシネマ（名駅）など映画興行を行う「中日本興業」。現在では、シネマ事業（ライブ含む）以外にアド事業、カフェ事業と多彩に展開している。来年には設立六五周年を迎える同社は昨年、年間興行収入が日本三位となった。今年五月に愛知県興行協会の理事長に就任した同社の服部徹社長に、シネマ事業を中心に話を聞いた。

——関東・関西圏の映画興行会社を抑えて、興行収入日本三位で

服部 地方の映画興行会社が三位となったことは、全国的に大変注目されました。それにはスクリーンの増設が大きかったと言えます。二〇〇七年に名駅にミッドランドスクエアシネマ七スクリーン、ピカデリー二スクリーンの合計九スクリーン体制でした。一六年ピカデリー閉館と同時に七スクリーンを増やし一四スクリーンにしました。増設当時、日本の

シネコンは二二スクリーン二四〇〇席が常識だったのですが、弊社は一四スクリーンでほぼ同じ席数にしました。映画館の稼働率が平均四〇パーセント程度という現状を受け、大スクリーンではなく、あえて一〇〇席ほどのスクリーンを増やし、他のシネコンより多いスクリーン数にしたのです。

——どんな変化がありましたか。

服部 余裕を持って幅広いジャンルの番組をスピード感を持って受け入れられるようになりました。一二スクリーンでは上映作品

数に限界があり、上映できなかったアート作品やアニメ作品の上映が可能になったのです。話題作「カメラを止めるな！」も、弊社ではシネコンの中ではいち早く上映することができ、初日には映画館前行列が出来ました。

これまでできなかった取り組みも可能になりODS（映画以外のコンテンツ）も広がっています。まず映画館でのライブを始めました。東海エリアで活躍する男性アイドルグループ「ボーイズ・アンド・メン（以下・ボイメン）」は、週二回、夜間にライブを行っており連日ほぼ満席です。映画館がボイメンの常設劇場の役割も果たしているのです。またハロープロジェクトなどのアイドルグループも毎週ライブを行っています。

衛星回線や光回線を使ったライブ配信も好評です。浜田省吾などのミュージシャンのライブだけでなく、舞台芸術など注目のライブ配信も行ってきました。3Dシアターの機材など映画館ならではのハードをフル活用することで、スポーツ中継などをその場にいるかの如く、観客は圧倒的な臨場感を感じることができるようです。ライブ配信は一般の映画収入より入場料が高く設定できるのもメリットです。

——名古屋駅前という地の利も大きいのでしょうか。

服部 交通の要所であり歩いてすぐですから、新作映画の舞台挨拶も大変多いですね。昨年は年間八〇回行われ、こちらも日本一となりました。ターミナル駅にある

映画館ですから、例えば郊外のローカル映画館で一〇人しか入らない映画でも、二〇〇〜三〇〇人の観客が期待できることも大きいでしょう。つまり、上映の可能性があるわけです。

名古屋駅のようなターミナル駅前には、オフィス、商業施設、飲食店が集中します。そこに映画映像文化があれば、潤いが提供できるだけでなく多彩な文化の担い手や発信源になることもできるのです。

——映画館の可能性はまだ広

がっていくのでしょうか。

服部 今後は単なる映画館だけではだめなのです。上映できる映像コンテンツは無限にありますから可能性は限りなくあります。例えば富士山での自衛隊演習のライブ配信など、マニア待望のニッチな映像も上映可能です。双方向で何でも出来ますし、映画館には十分な設備と大きなスクリーンがあります。

現在では、弊社の株主総会も映画館内で行っています。今のシニ

ア層は上質な文化に飢えている部分がありますから、それに応えられるように講演会なども開催しています。

——今後はどんな構想が？

服部 この十月には名古屋発のアニメ「シキザクラ制作委員会」への参加を発表しました（二十年放送予定）。「ものづくり愛知」と言われますがアニメ制作も、ものづくりに通じると考えています。

また映画制作をするクリエイターの受け皿になるようなアニメ映画祭やドキュメンタリー映画祭などの名古屋にふさわしい取り組みも必要でしょう。名古屋にはクリエイターを輩出できるような映画祭が少ないようです。撮影機材が安くなり、昔より制作費を抑えて映画を作ることができるようになり、映画を作りやすい環境になっていきます。そこで映画祭が開催できれば裾野が広がります。ターが増え、作品のレベルアップにもつながります。それに伴い映像文化を身近に感じる人も増えていくでしょう。

映画祭も含めて、文化をどこま

で発信していけるかだと思います。「独り勝ち」を目指すのではなく、地域全体や、各業界と連携しながら、名古屋を文化の街にする「街づくり」を目指します。今後は各業界と連携しながら多彩な事業を進めていくことになります。

——昨年、本社オフィスが桜通豊田ビルに移転しました。

服部 会議室や社長室はガラス張りにし、中央にカフェスペースを備えてオープンなオフィスにしました。社員の座席は毎日出勤時にクジで決めるようにしています。隣の席の人が毎日違うことで、様々な刺激や情報が交換もされるようになりました。

社員教育としての人間教育も、講師を招致するのではなく、少人数でのワークショップを毎月開催しています。七泊八日で「内観」を行う研修も、ほぼ全社員が体験しています。自分自信が面白いと思えないと仕事はできません。自分と自分以外が「ともに成長している」と社員それぞれが考え、面白がって仕事に取り組んでいければと思います。



服部 徹（はっとり とおる）
1959年生まれ。82年名古屋商科大学商学部卒業・松竹株式会社入社。89年中日本興業株式会社入社。2001年中日本商事株式会社取締役。05年中日本興業常務取締役。07年同社代表取締役専務。10年同社代表取締役社長。